

妙見山採集会に参加して

奥 谷 禎 一

在京中といっても、もう10余年前のことであるが、東京の虫や仲間、兵庫県というのは妙な処らしい。誰か、本式に採集してみたら、相当面白いのではないかという話を聞いていた。それが実現するなどは夢にも思わず、地図を開いては、未知の新採地探索をしていたものであった。また、私が、兵庫農大赴任と決定し、色々の方から、兵庫県が、昆虫学上かなり未開の地であることを暗示された。このとき特に指摘された地域が但馬であった。

赴任以来、既に新昆虫（8巻5号：16～20、1955）に記したように数回にわたり、氷の山・扇山を訪れ、各種の珍種を得ているが、残念なことにこの山塊の東端にある妙見山には足をむけなかった。その理由とは聞かれると返答に困るわけだが、案内してくれる人もなく、関宮の住人から、それ程価値のある所とは思えないとも聞いていたからではある。しかし、今回幸いにも、兵庫県生物学会の採集会が開催され、一通り案内して頂いたので、その片鱗を知る機会を得た。採集に好適のシーズンではなかったのに、昆虫相そのものについては何とも云えないが、見たまま感じたままを記して、今後の参考としたい。

まず、今回の採集会で目についたことは、例年に比べ、捕虫網をもつ参会者の多かったことである。これは、ご準備下さった山本先生が、特に妙見山の昆虫相の不明なことを考えられて、動員されたのかとも疑ってはみたが、そうではなさそうであった。

さて、妙見山の採集地としては、大別して3つの地域に分けられると思われた。第1は平地性昆虫の好採集地として、日光院より大滝までの谷沿いコースである。この日は天候にめぐまれ、アオバセセリが非常に多く見ら

れたが、実際その食草のアワブキが到る処に生えていた。これだけアワブキがあればスミナガンがいてもよさそうだが、遂に発見できなかったのは残念である。アオバセセリは他でもかなり見かけたが、この谷の数の多いのには驚いた。第2は日光院付近の山地。この辺ではまだ平地性の昆虫類が多く、特に夜間に野外での講演中に電気に集ってくるガの類が面白いようであった。オオミズアオの2世代目のが来たり、キマダラコウモリが飛来していたのは印象的であった。日光院より名草神社に到る道では、エゾゼミの鳴くのを聞いたが、本種は但馬地区一帯に海拔500m位の処に分布するようと思われる。屋根道は概ね採集に適さないので、ここを素通りして、第3の地点、名草神社がよい。名草神社の杉の大木は、かねてから聞いてはいたが、見事なもので感心した。この付近は北九州の好採集地として知られる英彦山権現を思わせる。この付近の代表種としては、ヒメキマダラヒカゲを多数採集していた。温帯林の代表種のブナがないことはきわめて淋しいが、以前には名草神社あたりには生えていたものらしく、稚樹を見つけることができた。氷の山・扇山では、これ位の標高（約700m）では、殆んど針葉樹の原生林をみることはできないので、妙見山の杉の原生林は但馬山岳地帯の重要な意味をもつように思われた。

結論として云えることは、妙見山が、但馬山岳地域の最東端の1,000m級の山であること、原生杉林を有することの2点が、昆虫分布学上どんな意義をもつか、非常に興味をひいた。

今回の採集会を機に、氷の山・扇山ばかりでなく、妙見山も本格的調査の対称として、もっと徹底した採集を行ないたいものと思う。